

特集 地域支援

「きりしまMワゴン」

～デジタルのフル活用で
いつでも誰でも利用可能な地域公共交通に～

トヨタカローラ鹿児島 株式会社

町いちばん活動の一環としての取組

トヨタカローラ鹿児島 株式会社（中村博之 代表取締役社長）はかねてから、地域貢献の取組である「町いちばん活動」として、子どもたちを対象としたスポーツ大会への協賛など、地域と社会が「笑顔」になる活動を行っている。この「町いちばん活動」の一環として、交通不便地の居住者や免許返納後の住民に向け、商業施設や医療機関への移動を支援する「オンデマンド乗合送迎サービス」を展開している。

2021年7月同社は、鹿児島県志布志市と共同で、高齢者や移動手段のない方の外出機会創出を目的とした完全予約制の乗合送迎サービス「チョイソコしぶし」の運行を九州で初めて開始した。小学生以上の同市市民は無料で会員になることができ、1回の利用料は200円（税込）だ。なお、ディーラーが運営に関わるのは全国でも3例目であった。

2023年11月20日には、「チョイソコしぶし」に次いで2例目となるAIを活用したオンデマンド乗合送迎サービス「きりしまMワゴン」を同県霧島市と共に

霧島連山をモチーフにした
ロゴマーク



同で運行を開始した。

「きりしまMワゴン」は、株式会社アイシンのチョイススキームを利用して、一方で、独自の名称やマークを新たに作成するなどアイシンの許可を得た上でその独自性を打ち出しているのが特徴。

同市においても各種交通課題がある中で、地域住民の移動の利便性向上を目指す中重真一 霧島市長の思いに対し、同社から提案し実現したものだ。なお、運行に先駆け、同社は同市との間で、昨年7月27日、「持続可能な地域公共交通の構築に関する連携協定」を締結。地域の活性化を目的としたオンデマンド交通の運行に向け計画を進めてきた。

現在「きりしまMワゴン」が運行している地域は、霧島市役所を中心とした

誰でも利用できるシンプルなシステムに



締結式で協定書を手にする中村社長（左）と中重市長（右）

「中心市街地」と、鹿児島空港から北寄りの「溝辺地区」の2つのエリア。
 運行日は、中心市街地が火曜、水曜、金曜、土曜の週4日で、運行時間は8時30分～16時30分。溝辺地区は月曜、木曜の週2日で、運行時間は8時30分から17時30分となっている。また、運行車両台数は、中心市街地が2台、溝辺地区が1台で、地元の中村タクシー、及び旭交通に運行事業を委託している。

霧島市では、従来からコミュニティバスを運行していたが、市の交通計画の中で、溝辺地区については利用者の少ない路線を一部廃線にしたり、市街地においても一部減便にしたりと、住民の足が不足しつつあった。そこで、その代替手段として、オンデマンド交通の導入に至ったという。

前述した先行の「チョイソコしぶし」をはじめ全国のチョイソコは、比較的高齢者向けの移動手段といった側面が大きい。そのため、会員登録を一般会員（64歳以下）と高齢者会員（65歳以上）などに分け、利用できる停留所等サービスが異なるケースがある。

一方で、霧島市においては、会員条件を「小学生以上の市内居住者または定期的に同市を訪問する人」（小学生又は中学生の会員登録には保護者の同意が必要）とシンプルな形にし、基本的に霧島市民だけでなく、来訪者も含めて誰でも無料の会員登録を行えば、即座に同じサービスを利用できる。

さらに、志布志市をはじめ他地域では、



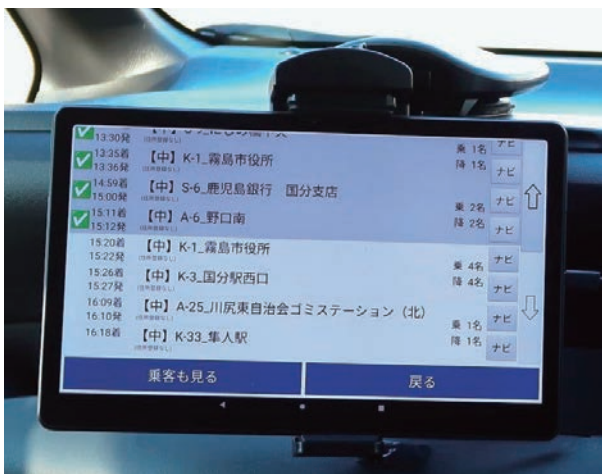
車両の側面や後方にスポンサー企業名やロゴのステッカーを貼る

会員登録の申込手続や乗合サービスの利用予約は申込書の送付や電話等、アナログ的な運用をしているところが多い。一方で霧島市は、DX化を謳ってデジタルのフル活用を進めており、従来の申込用紙や電話による受付に加えて、インターネットでの受付を可能としている。

その上で、「如何に市民の方々に利用していただきやすい環境を作るか」ということに重点を置き、ユーザーインターフェースのための専用アプリを導入。乗車予約に関してもアプリから簡単に予約ができる形とした。

なお、アプリの利用促進策として、アプリを使用した乗車ごとにデジタルスタンプが貯まったり、誕生日に割引のクーポンが発行されたりと、形に現れる工夫がなされ、楽しみながら乗車できるような仕組みを構築している。

こうしたことから、会員の登録件数は、立ち上がりとしては非常に多く、11月下



車内に乗降場所や時間などの予約状況が映される。予約が入ると、AIが最適なルートを選ぶ

旬時点で300件を超える登録数となっている。他地域に比べて、登録手段はwebによるところが多いとのことだが、登録者に占める高齢者の割合が少なく、若い世代が半分強を占めるという他の地域にはない特徴的な構成となっている。

霧島市では長期的な取組を計画

国内でチョイソコが運行されている地域では、現在、乗車無料の実証実験という位置付けになっている地域が多いが、霧島市では長期的な取組を予定していることから、開始当初から運賃を徴収する形で運行している。運賃は、全国の多くのチョイソコと同様、基本的に1回の利用に際し200円（税込）（但し小学生・障がい者は100円、未就学児は無料）。支払いについても、現金以外に電子マネー、クレジットカード、交通系IC、QRコード決済などにも対応している。

チョイソコの特徴であるスポンサー制度についても、同市では立ち上げの時点から注力しており、運行開始前に既に24の団体・企業とスポンサー契約を結ぶことができ、好調なスタートを切ったという。



乗降時のステップは必須アイテム

なお、スポンサー料は一律ではなく、料金の高い順に、5万円、2万円、1万円、5千円、3千円となっており、車両への広告掲載のサイズ、貼付点数などに違いを持たせている。また、スポンサーには停留所の設置を依頼している。

幅広い年代層が利用

同市では、高齢者に限らず幅広い世代、特に若年層においては、そもそも公共交通機関すら使ったことがないという人が相当数存在する。そのため、一つの特徴

的な取組として、第一工科大学のキャンパス内にも停留所を設置している。同大にもスポンサーになってもらい、若年層の方の利用、公共交通機関を移動の選択肢の一つにしてもらうという取組にも力を入れている。

なお、志布志市の会員登録の構成比をみると、65歳以上の女性の構成は60%近く、同じく65歳以上の男性が25%近くであるため、合わせて約80%の方が65歳以上となっている。一方、霧島市では65歳未満が約半数を占めるなど、状況が全く同じではないため一概には言えないものの、利用者の割合では違いが顕著に出ている。

また、立ち上がりの状況について志布志市と比べると、志布志市は運行をスタートさせた月の会員数は、1か月で109件であり、300件を超えたのは運行開始後3か月が経ってからであった。人口の違いなどもあるが、これと比較すると霧島市の立ち上がりは非常に好調な滑り出しと言える。アプリに関しても11月下旬で285人がダウンロードしており、実際にダウンロードユーザーの年齢層を見ても、60代の方にもダウンロード

をいただいております、年齢を問わずアプリを利用されているとのことである。

そうしたことから、目的地で一番多いところは「スポーツクラブ・エルグ・テクノ」で、次に病院となっている。また、主要駅である国分駅の西口も多く、様々な活動や目的に応じて効果的に利用されているようである。

通常、志布志市のように申込用紙による会員登録の受付は、会員証が届くまでの3週間ほどは利用ができないということになる。しかし、この「きりしまMワゴン」では、インターネットによる会員登録及び乗車予約が可能であるため、スマートフォンにアプリをダウンロードし必要事項を入力すると、即座に会員登録が可能となり、乗りたい時にすぐに会員登録ができる仕組みだ。

こうした利点を生かし、中重市長の意向としては、「今後さらに運行地域を市内全域に拡大していきたい、インバウンドも含めた観光利用にも広げていきたい」と期待が膨らむ。

なお、「きりしまMワゴン」のドライバーによると、利用者からは「非常に利便性が高く、車両の乗り心地が良い」と



停留所が設置された霧島市役所



高評価を得ているとのこと、地域に支持されつつ、さらなる発展が期待される。